

# 2020年度GTセミナー GTリーダー研修～プレワールドサミット～ 2020.11.13～11.14

第195号 2020年11月23日発行

## ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や  
ご要望に応えるコンシェルジュがいる  
ように、保育においても様々な  
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=  
ミマモルジュとして、保育に関する  
ご要望にお応えしていくよう  
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

## GTリーダー研修～プレワールドサミット～

2020年11月13日～14日にGTリーダー研修～プレワールド  
サミット～を新宿せいが子ども園にて開催しました。

全国から35施設の先生方がセミナーにご参加頂きました。  
今回は、シンガポール・韓国とzoomを繋ぎ、両国から講演をして  
頂きました。

### 1日目 2020年11月13日(金)

10:00～ 新宿せいが子ども園 見学（オンライン見学）  
12:00 終了

### 2日目 2020年11月14日(土)

10:00～ 講演①アイリーンさま  
「シンガポールでの見守る保育の取り組みについて」  
11:30～ 質疑応答  
12:00～ 昼食  
13:00～ 講演②藤森先生「世界の保育の流れ」  
14:30～ 講演③孔さま「ヌリ課程と見守る保育の共通点」  
15:30 まとめ  
16:00 終了



---

## G Tリーダー研修～プレワールドサミット～ 「世界の保育の流れ」

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

---

### —はじめに—

皆さん、こんにちは。コロナの中で皆さん来て頂いたんですが、午前中シンガポールの話を聞き、お分かりだと思いますが、遠くからでもうちに来るというのは、保育は実際に見て触れてみないと伝わり辛いもの。コロナなのでzoomでやっていますが、うまく伝わりにくい。遠くから来ると、お金も時間もかかるかもしれないですが、シンガポールでは、皆さんで来て、実際に体験していくことに頭が下がります。それはたぶん、心配されるのが東京。昨日世界で一番住みやすいランキングで、東京が世界一位になりました。何故一位かというと、交通網が発達していることと、人口が多いのにコロナが少ないことだそうです。日本だと、東京は多いというが、世界から見ると人口のわりに少ないと。街の中を歩いていて人が多い、この人の中で300人かと思う。各県からすると多いなと思う。先日、甲府へ行ってタクシーに乗った。「7時間待って、やっとお客様が一人」と運転手が言っていた。東京で300人だから安心していいわけではないが、刷り込みがある。京都は中国人の観光客が多い、中国人の観光客が多いから、町が汚いと言われていて、コロナで観光客がいなくなってしまった。それで、京都の町はどうなったかが出でていたが、街がきれいになつたかと思うと、以前より汚くなつたらしく、汚していたのは日本人だったらしい。教育も色々調べたときに、中国とシンガポールがすごい。アメリカは逆に受験競争が激しくて、受験産業が盛んだそうです。私たちが民主主義でアメリカを真似していたところ、実際そうではなかったということです。時代的に触れるので、今後見直し始めていますが、そういうことがあります。私たちはどこの国が、どうかではなく、個人的な問題。散らかす人が中国人にいるかもしれません、日本人にもいる。

### —刷り込み—

この間、セミナーをしたときに相談されたのが、園に黒人とのハーフの子がいる。その子がいじめられるから、先生は、例えば、スポーツ選手に活躍しているんだと子どもに見せているが、いじめがやまないと相談を受けた。差別をしているのは先生じゃないかといった。「黒人だって活躍している」というのは何それ?と思う。黒人だから、ということ事態が差別で、いじめられている子も、ハーフだからと思いつすぎて性格的なこともあるかも知れない。いじめるのはいけないですが、ハーフだからではなく、その子がどういう性格なのか。その子の個人の問題として捉えないと、何人だからで、そこに理由をつけてしまう。それ自体が差別です。個人として見ること、悪いことをしたら怒り、いいことをしたら褒める。それが他の子に伝われば、その個々人の問題になる。結婚でも国際結婚すると気が合わないというが、日本人同士でも気が合わない人はいる。外国人だからと、理由に一番しやすいがそうではない。グローバルは、大きな括りで人を判断しないこと。個人はどうかということ。ただ均一ということではありません。これからグローバルな時代は何なのか。英語が話せるからグローバルとは違います。人を人として見れることや、STEMという取り組みを始めたが科学というと、プログラミングでコンピュータを動かすことと思うが、そうではない。STEMは、驚きや好奇心を持つとか、不思議を感じること自体で、たまたまキーボードですることが、プログラミングです。私の園でやっているのが散歩にどういう意味があるか、塾セミナーで議論した。幼稚園はなかなか散歩へ行かないで、園庭を重視する。それは30人ひとり担任なので、散歩へ行けない。私の孫は幼稚園に通っていたが、散歩へ行ていません。それは園庭でやればいいというが、散歩へ行く意味もいろいろある。散歩はプログラミングで、今日は何とか公園に行くときに、どの道で行けばいいかとか、信号2つだけだったらどの道で行けばいい

かもプログラミングです。散歩へ行くときに、先生二人をどこにつけるかの話をした。先頭につけるか、真ん中ら辺かでどうしてかで、たまたま見ていたら、うちの園は先頭は子ども、真ん中と後が先生で、他の園は先頭と後ろに先生がいる。前にいると子どもが見えないので、先生は時々振り返る。私が教員の時に、教員らしくないと言われたことがある。子どもたちと外に出かけたときに、私が先頭を歩いていたら、一度も振り返らなかったと言われ、教員は定期的に振り替える癖がついていると言われたが、そういわれたのを思い出したが、プログラミングだからコンピュータではない。それをするための手順。ブロックを置いて、ビー玉がどうしたら転がるかというのも、プログラミングです。幼児期について言うように、本当の本質を見ていかないといけない。

## —世界での保育・教育改革—

世界がどう保育をしているかというと、時代的に見たときに当然、今まで頭がいいねと、頭が良かった子は、多くの知識を持っていた人。テストは、どれくらい知識を持っているかを試すもので、実際は頭の中に知識を詰め込んで、これからの時代はすぐに情報が手に入る。ですから、情報を手に入れたかが成功に繋がるわけではない。昔は親が子どもに成功させたい、そのために知識を詰め込んだが、これからの時代はそうではない。そうすると、技術が急速に進歩した場合、どんなスキルが必要か。今の祖父母の世代とは、その価値観とは違う。若い先生たちと祖父母世が言う、昔の保育とは全然違います。それは本当の年齢ではなく、若くても保守的な人が居る。新しいことに前向きかどうかですね。それなのに、この時代の早さに、教育がついて来れない。コロナがあったら休むしかない。こういうことに対して、新たな成功するとはどういうことか。世界で共有され始めています。これからを目指す姿が健やかで、思慮深く、思いやりがあり、他者と関わって生きることが、幸せに生きると言われています。これが非認知能力と言われ、他者と協力して、創造的で自分の能力を存分に発揮できる子を育てる。O E C Dなどが求めている子ども像です。ただ、漠然と子どものためではなく、きちんとこういうことに向かっていく子たちを育てていくことです。そのために、いろいろな教育があるがO E C Dが出したエデュケーション2030です。2018年に小学校に入学した子が、成人として社会に出るのが2030年だからです。私達の仕事は、社会に出てどんな力を発揮するか何ですね。いい高校、大学に入ることではなく、社会で力を発揮する子を目指さないといけないんですね。どんな大人になり、社会を作っていくかという事です。震災が起きようが、コロナになろうが、それに後退してはいけないと思います。O E C Dが出した2030に具体的に、グローバル化も語学ができるという意味ではありません。どの国でも、障害でも、年齢でも尊重される社会が進展してくる。技術の進歩が加速していきます。社会経済などの分野において凄い変化ですね。この変化がコロナにより加速化しています。なくなるであろう仕事がなくなり始めています。私たちは変化が嫌だな、どんな時代か不安だなど子どもに伝えてはいけないです。子どもたちはその変化を前向きにとらえて、わくわくして新しい未来が来るんだと考えないといけないです。そのために準備をしていくことです。将来に向けて、今から準備をして前向きにとらえる。そういう事をしていかないと、子どもたちに伝わってしまいます。そうすると、今では存在しない仕事に就いたり、開発していない技術を使おうとしたり、研究者なら過去の事例を学んでいったらいいですが、これからを生きる子どもたちは、新しい時代の課題を解決する力は今から予測がつきません。ですから、その力をつける準備を、これまでと変えないといけないです。不確実な中の目的に進んでいくために何が必要かと言うと、好奇心や創造性、自己調整力、他者の価値観を尊重することが求められ、これがある意味グローバル化です。先ほど、シンガポールで最後に言いましたが、否定されることや心配に恐れない心、逆光に向かっていかないといけないです。そういうことは単に自分がいい仕事に就くとかではなくて、地球全体の幸せを考えないといけない。自分だけが幸せになることでないですよ。それがグローバルな時代で、相手も、共に幸せにならないと

自分の幸せも来ない、これがグローバル化です。それは全てが関連し合っているからです。単独ではなく関係していますから、それを考えられる子にしないといけません。それは子どもたちだけではなく、大人もそうしていかないといけないです。エデュケーション 2030 には、2018 年に入学する子に、資源は無限ではなく有限で、私達の時代は無限にあると思われていましたが、子どもには有限だと、それよりも人類の持続可能性に価値を置くことに価値が求められています。その中で、コロナで分断されている社会を共同してより良く短期ではなく、持続可能にしていく。そういうために責任を負うとともに、権限を持つ必要があるとエデュケーション 2030 のビジョンで提案されています。

## —エデュケーション 2030—

この 2030 に向かってあと 10 年になりました。そういう事に対して「vuca」と言う言葉を覚えて欲しいです。不安定で、不確実で、複雑で曖昧。こういう世界になってくる。こういう中で、新たな科学の知識は膨大化して、課題を解決していく時代で、カリキュラムも新しくしないといけないだろうと言われています。その中で教育目標としては昔と違ってきました。不可欠な能力として明確で目的のはっきりした目標を立てる。異なる考え方を持った人と協働すること、まだ利用されていない機会を導けること、複数の解説策を把握すること、難しいかもしれません、リーダーという事で根本を知っておいた方がいいと思います。2030 の中に変革を起こすコンピテンシーとして新たな価値を創造する力。0 からの創造性ではなく、結び付ける力と言われています。対立やジレンマを克服する力、最適な解を見つけていかないといけない。ダイバーシティーと言って、多様性の時代は終わったと言われています。それも「いいね」だけではなく、多様性を合意していかないといけないです。180 度違う考え方の人と一緒に作っていかないといけない。共感して、乗り越えていかないといけない 3 つ目が、責任ある行動のことで、新たな価値を創造する力では、個々の思考や作業のみならず、他者との協力と共同により、既存の知識から新しい知識を生み出すことを通して、益々引き起こされるようになります。これが適応力や想像力、好奇心、開かれた意識と言われています。提案する保育の一番の特徴は、子ども同士の関わりで、ヨーロッパは個人主義が中心で、個人の自発性はありましたが、アジアが持っていた、助け合う等を基盤としたカリキュラムを提案しているのが特徴です。それをシンガポールも捉えてくれています。子ども同士が関わることを、先生が見る意味合いがあります。新たな価値を創造するにも共同性が必要です。zoom で知識を伝達しますが、協力・協同が行われませんので、新たな価値が想像できていません。知識は伝わりますが、過去のもので知識だったら、本やクリックすればいい。そのためには議論したり、協力が必要になる。コロナを乗り越えて出来る試練だと思います。2 つ目の対立やジレンマを克服する力では、格差によって特徴づけられる世界においては、多様な考え方、やりがいを調停していく緊急性があり、そのために若い世代が、例えば公平と自由自治と集団、イノベーションと継続、国立性と民主的プロセスのように、集団と個人が対立構造にあるものをバランスを取って行く。どうしても対立もジレンマもある。これをトレードオフ、あるものを得られたら、あるものを捨てないといけないというが、育児と仕事は両立しません。どうバランスとっていくか。両立はもともと無理で、バランスを取って行く。時期によって子どもが小さいうちは、子どもにシフトしてとか、バランスはその人の生活によってバランスの取り方がある。全員が園に入ればいいとかと言う話ではないですね。こういう事が色々な物に対しても対立するものがあり、あるものは捨てないといけない、これが捨てきれない、そして息詰まる。こんなことはいっぱいあるので、必要になってきます。対立する要求の間で、バランスを取ることが求められます。二者択一の選択で解決策に繋がることは稀です。一人ひとりがより、総合的に考える必要があります、ドイツでは、参画があります。例えば、遠足行きましょう。代表の子どもがどこに行くか 5 つ候補を出し、階段の踊り場に候補を貼り、

自分がどこに行きたいか投票していきます。例えば、山や川など候補があります。その中で、多数決では山に決まりますが、山に決めるのではなくて、何で海に行きたいかを意見を聞く。でも、どこかに決めないといけない。水に触れることも大事だねとなると、水のある山にしようとして、両方の意見を調整していく力なんですね。どっちかではないです。それは対立などを乗り越える力が、これから必要といわれています。将来に備え、矛盾した考え方や相いれない考え方や理論、立場についても、それらの相互の繋がりや関連性を考慮しながら経験していくことです。簡単に決めにくい時に多数決にしましょうではなくて、子どもたちがゾーンを開ける、閉めるを決めるときに、何でそこ開けたいのかを聞きます。人数が少なくとも、開けようかとか、一杯希望があっても、昨日片さなかつたから今日は閉めるとか、多数決で決めるだけではなく、理由を聞いて調整する力が必要です。3つ目の責任ある行動をとる力とは、新しい子と変革、多様性や曖昧さに対応していくという事は、個々人が自分たちのことを考えると同時に、他者と共同することを想定しています。子どもたちが自分で選択をすると自分で責任を取る。自分でやろうとすることですね。そういう事もあります。成果物に対して責任を取ることは、自分でやろうとすることです、その力をつけることです。このことは、責任を示唆するとともに、過去の経験や社会的、個人的目標、これまで数えられ、言われてきたことで何が正しく、何が間違っているかと照らして、自分を振り返ったり、自分の行為を評価するという道徳的かつ、知的な成熟性を示すもとと言われています。その中で倫理的に行動することは、何をすべきか正しかったのか、限界はどこにあるのか、そうするべきだったかを問い合わせるという事です。これは選択という事で、見守られていることが責任を取ることです。

## —「見守る」とは—

私の娘が結婚するとき、両親に手紙を読むとき、私の娘は保育の仕事をしているわけではありません。その中で「これまで育ててくれてありがとうと言うつもりはありません」と言われ、ずっときました。「父はそういうよりも、私をここまで見守ってくれて有難う、と言った方が喜ぶだろうと知っているからです」と言っていた。父親に見守られていたから、これでいいんだろうか、人として悪くないかを考えていたと言っていた。ですから、例えば結婚式だから言ったんですが、この人と結婚したいと言った時に、「父はお前が決めたことなら、何よりも正しい」と言ったから、責任をもって決めないといけないと思った時に、「見守る」ことは、責任を感じることで、信じられているという事ですね。職員に対しても、見守っていることは信じていること。職員は、信じられたら、へんなことは出来ないです。責任は見守る中に当然、見守られている中の責任取れという訳ではなく、自分を振り返る力が責任を取る力になってきます。

## —これからの保育①—

これらの能力における敏感期の研究が進む中、乳幼児期における脳と生物学的な発達は重要な一里塚であり、非常に感度が高い時期ということが分かってきました。幼児教育が大切なのは、O E C Dが目指すためには、乳幼児期から、取り組んでいかないといけないと言っています。ということで、これから教育を分かっている国々は乳幼児期に行くと思います。これまで高等教育でした。その国繁栄させると思っていたが、国を平和にするためには、乳幼児期が大切だと分かり始めています。そのためなぜ保育を変えないかと言うと、脳の発達からの研究です。白紙論ではないという事です。シンガポールでも気づいたことですが、何もできない、知らないだろうではなく、学ぼうとする力を持っている学習者という事です。余分な手出しあはしないという事ですね。もう一つの課題は、今言われているが、文化的実践にしないといけないです。保育の中では、子ども同士が自然に関わる時、驚きや感動、不思議さを大切にしてきました。絵に描いたり、工作をしてアートにして表現してきましたが、これからの時代はアートの世界で

はなく、科学の時代に行くべきではないかと言われています。科学とは、その感動、不思議さを実践に繋げていくことをしないといけないです。素晴らしい絵を描くことが何に繋がっているかが、これから説明できないとだめな時代になってきました。それは研究が進んできているからで、情緒的なことで終わるだけではいけない。次の日からどう保育をして行けばいいかに繋がらないので、これからの時代は情緒的なことだけでは続かないです。保育の中での「これって、なぜ?」という事をプロジェクトにつなげていかないといけないです。ただ工作して終わりではなく、協同的学びにして、上手にやるために、プロジェクトにしていかないといけないです。入学後にアクティブラーニングにつながっていきます。うちの園で、ごっこゾーンでピザ屋さんごっこをしています。ウーバーイーツを段ボールで作りました。注文して、それを持ってきました。ある男の子3人が職員室に入って来て、ウーバーイーツでカードの支払いをすることがあるが、「支払いのカードを作りたいから、見せてもらいますか?」と職員室に来た。その後作ったか分からぬが、これがプロジェクトで、ただ絵を描いて終わりとかは変えないといけないです。これがある意味、STEMと言われる科学です。行くための仕掛けを先生がしていく。それが具体的な行動に移すここまで行かないといけないです。それがその後の学びの基盤になります。数を早く覚えさせることではありません。アクティーブ・ラーニングが最初、身体を動かすイメージがあったかが定着率を見てわかったが、ラーニングピラミッドと言って、どの学び方がいかに定着するか、講義を聴くはこれまでの古い学び方で、先生の話の5%しか定着していません。本を読む、資料を読むと少し深まります。それより深まるのが視聴覚、私が教員試験を受けたときに視聴覚の課題がありました。OHPを使いこなすと言うことがありました。実践を見ることで30パーセントになるとか、かつての学校の授業でした。これを新しい時代の教育に変えていこうということで、グループ討議が世界の中で先駆的と言われていて、算数の授業で分からない時に日本では、そういう時には班で話なさいとする。世界では討議をさせることはないと。それよりも、大事なのが自ら体験すること、一番定着するのが人に教えることで、中々人に伝わらない。グループ討議、自ら体験する、他人に伝える、この3つがアクティブラーニングと言われています。今回の学習指導要領が4月からはじまっていますが、実はその一つの目玉がアクティブラーニングです。コロナによってすべてがなり、戻ってしまいました。これからの教育です。乳幼児期において、アクティブラーニングが見る、触る、舐める、聴くとかが不思議さの基盤になる。赤ちゃんは、やたらやりたがります。私の発見ですが下の3つは赤ちゃんの特徴です。人に教わるよりも教えたがります。それは学びが深いからです。教えて学んでいます。赤ちゃんはやりたがります。それが大人になると、上になってしまいます。赤ちゃんの学び方で見る、触るなどは自ら体験することです。この環境をするのが先ほど言った具体的な環境を用意しないといけない。いろんなことを学んだことを実際に体験できるようにする。科学実験も実際に見るようにして、皆で話すようにして、それをアウトプットするようなゾーンを作るとか、グレードが高いが、体験だけではなく、次は人に伝えていくゾーンを作っていくことです。

## —これからの保育②—

アメリカの失敗例で、模索をしています。まず大統領によって政策が変わります。その中で模索しています。トランプによって全く分かりません。今まで全で教育政策を出していました。オバマはしっかり出しました。クリントンは、危機に立つ国家という事でアメリカ教育法を出しました。これが1994年に成立しています。アメリカがリードしてきたことを維持しようと21世紀に向けて、高い学力を付けさせようとします。これが失敗します。具体的な目標としてアメリカの学生は、数学科学でトップになる。アメリカの成人は、読み書きができるようになるという高いレベルを要求しました。しかし、アメリカは州によって、違ってしまうので、国家で統一した目標を立てるのが難しい。結局クリントン政権の時代は、教育改革が出来なかった。今度はブッシュの頃に、落ちこぼれ禁止法を作りました

た。今まで多くの大統領が、教育を重視する大統領と言っていたが、間違えていたことがあるが何をしたかと言うと、落ちこぼれを失くす、ある学力をつけさせるN C L Bと言う法律を作り、国家的課題にしました。国家が教育にシフトして、何をしているが説明させたにもかかわらず、改革を具体的にしていくんですね。まず学習科学の専門家が集められました。政策決定者と手を携えて、改革に取り組むできる改革できると喜んだが、これが何らかの政治的力が関与してきた。国語や数学の点数だけで評価委していた。日本でもそうだが、体育や音楽を削っていました。アメリカで羨ましいのは、英語の授業がないからです。でも、これが改革の主眼となりました。PISA の学力調査では、いい順位になるので目指しますよね、結局採用されたのが、政治的な力、丸暗記をした知識をただ吐き出すテストになってしまった。空欄を埋めるテストが授業の中心になってしまいました。

### —これからの保育③—

日本でもトップの県があるが、毎日テスト漬けですよ。しかも、国語算数だけですよ。本を読むことからはじまり、家でもたくさん宿題がある。これが大失敗に終わります。4歳だった子が11年後、15歳にPISAの検査を受けたら、数学が30か国中13位、読解20位、科学が23位でした。見直されたのが、学校や人生における成功とは異なり、これからの中もたちが生きる世界で、テストは評価されているのだろうか?となり、そういう教育では、発見しイノベーションを起こす人々を育てるに失敗し、デービットという人が書きました。これまでのアメリカの教育では、与えられたものを真似していく人を生み出していくだけ。と出した。アメリカでは、親が変えない、塾があるが今までは落ちこぼれ、進学テストで個別試験をしていたものが変わって、他の仲間より一步進んで、いい塾に行くことに変えてしまった。すべての年齢の子どもにサービスをする予備校に変わってしまった。ある本では、幼児教育ビジネスが増えている。幼児塾が悪いわけではないが、反射的にさせる塾が増えてしまいました。テスト業者も利益を上げています。断片的な知識を覚えているから成功。数十億ドルの規模になっているそうです。玩具、教育玩具もフラッシュカードやゲームやモビールがビジネスになっています。教育アプリなどが、これまでの価値観に凝り固まった人たちを生み出して、その中で早い段階で始める早期教育を始め、なるべく繰り返すという価値観がまだまだ根強いですね。いい大学に入るために競争がすごいですね。自由で、個人の発想を伸ばしていたところが、こんなになってしまったと、変わり始めました。中国が私たちと同じようにアメリカに憧れました。ノーベル賞を生み出したり、シリコンバレーのように中国が教育改革をします。受験では学力が上がらないと言って、アメリカにします。子どもが列になって並び、同じように頭を抱え教師は言うことに耳を傾けていた教育をやめよう、時代錯誤と言って中国がやめます。しかし、皮肉なことにアメリカが昔に戻り、時代錯誤の知識を覚えることには正反対で、新しい創造性を重視する。中国からの客員教授はアメリカで学んだことを中国は、教師中心だったものを学習者中心者に変えよう、丸暗記をすることを変えようとしたら、アメリカが丸暗記をするような学習にしてあっけにとられている。しかし、科学的にだんだんわかってきた。記憶中心のテストが受け身で、学ぶ意欲の低い学生を生み出していると考え、中国ではガオフェンディンエン（高分低能）に変えました。2017年から2018年に幼児期に関する政策を始めました。一つは全ての幼稚園が3~5年に1回監査を受け、評価を受ける。2つ目が幼稚園における早期教育機関も含めて、小学化教育を全面的に阻止する。これは後から伸びないから。但し公立園で、私立は受験勉強をしているそうです。今中国で「見守る保育」が広がっているのは、そういう事です。ズームでレクチャーをしています。ある園長がコーナーを作るとかは、公立はすべてやっていることと同じですと言われました。私立は親の要望で、受験勉強をしていて、それを変えていこうとしています。何で私が受けているか分かりますね。4つ目は、園児に対する差別、侮辱、卑猥、虐待などを禁止する。5つ目が、民営や私立幼稚園は資産として上場することを禁止する。幼児教

育を投資の対象としてはならないという事です。日本は規制緩和でどんどんさせています。だからと言って企業が悪いわけではありません。朝日新聞にブラックの園が出ていますが、トップ10は社福です。社福だからよくて、企業だから悪いという事ではありません。お母さんが子どもにとっていいというとも限らないで、いい方がいいです。シンガポールの改革はすごくて、教育相が将来を担う子どもたちを育てるしかないと考え、国際学力テストでトップになることではなく、世界に進歩をもたらす人材とならないといけないと考えています。学校は健全な自己認識と倫理基準を持ち、未来に向けて挑戦する多面必要なスキルと、知識を身につけています。結論から言うと、教育改革が進んでいます。接続する幼児教育がなく、そこを見出したのがアイリーンさんです。アメリカは制作、芸術、休みを取り上げたが、シンガポールはアメリカが除外したものを大事にした。そこにシフトした。今はどんどん学力が上がっています。という事で、教育相は今4、5歳の子どもが将来働き始める頃、シンガポールの経済的繁栄を維持できるよう、クリティカルシンキングする力を持ったクリエイティブイノベーション新しいものを生み出す力、自ら問い合わせ立てて解を見つけていく人。若い人たちに伝えたい価値観は、自分の強みを活かし、人生において避けることのできない失敗を乗り越え立ち直る力を持つことが学校改革で大改革をしていることです。戦略としてステム教育を勧めています。シンガポールは、国防費と同じくらい国家予算を教育に充てているそうです。その結果、OECDが行っているピサの学力調査で科学と応用力が1位になった。アメリカの真逆を行った結果上がったということです。その中でアクティブラーニングを早くから取り入れ、ハンズオンと言って体験学習を取り入れました。座学だけではなく、手で触ったり、自分で体験することを重視しました。この活動を通して学んだことが何に役立っているか実感できる。これが今回シンガポールの改革する力になっている。そうやって受けた人が保育者になると、いいと思ったらすぐ取り入れる。世界の教育改革は、創造性に重きを置いてなかった国、中国やシンガポールは受験国と言われていましたが、そうではなく、新しい問題に立ち向かう多くの仕事をロボットに渡し、人間がすべき仕事をしようと、この2国は取り組みました。図らずも、中国やシンガポールに行っているのは、向こうからアプローチしてきました。新しい時代に向けて、見つけたことです。私も良く言うのですが、シンガポールや中国に進出したいわけではありません。うちの園のラインに、「藤森先生が中国に進出しようとしています」と書いてあった。親が「えっ!!」と思ったその下に、今日は「エイプリルフールです」と書いてありました。園を作るつもりも、広げるつもりもありません、基本的に日本に気づいてほしいです。今の学力の高さを維持するためには、このままではじり貧ですよ。

## —終わりに—

それを変えたいために、こうやって、前向きに世界も教育改革をしていると言いたい。ひとつは中国であり、シンガポール、そして韓国も大きく舵を取り始めています。又課程が細かく規定されていましたが、それが今回改訂されました。大きく幼児教育が改革した話をして烏山大学で改革に関わっている先生に話をもらいます。大学の教授であり、大学の修士課程が、名古屋大学、博士課程が学芸大で日本語が達者です。1時間ではもったいないですが、彼の話をこの後聞いてみたいと思います。少しでも、自分たちがやっていることが、世界の中で、それも自分の園を変えるだけではなく、世界を変えるくらいの気概を持ってほしいです。セミナー人数が少ないので、まだまだ日本の危機感の表れだと思っています。シンガポールのように学ぶ意欲は、何ならできるか、自粛なんか感じない。前向きにこの時代を乗り越えてほしいと思っています。私の話はこれで終わります。ありがとうございました。

本稿は、2020年11月14日に行われたG Tリーダー研修～プレワールドサミット～の基調講演の内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)